

プログラム11「李叔同の《送別》について」

西槇偉（熊本大学教授）

犬童球溪の《旅愁》との関わりで、李叔同作詞の《送別》が今回のプログラムに取り入れられたことは非常に意義深いことと思われます。明治末の日本に留学した李叔同は、《旅愁》に触れ、それを踏まえて作詞した《送別》がその後広く歌われ、今日では中国の国民的唱歌になっています。ここで、李叔同とその《送別》について簡単にご紹介いたします。

近代中国における西洋美術、音楽教育の先駆者

李叔同（り・しゅくどう 1880～1942）は中国では新文化運動の草分け、また出家してから高僧としても知られています。彼は文学をはじめ、美術・音楽・演劇・仏教など幅広く涉猟し活躍したが、唱歌《送別》が代表作とっていいでしょう。

李叔同は天津の生まれで、その父親は科挙の合格者、進士でした。よって、李叔同は伝統的な教育を受け、科挙の受験も経験したが、上海で設立された南洋公学に学び、新しい学問の洗礼も受けました。日本留学に赴く1905年までに、彼はすでに日本語から『国際私法』（1903）を翻訳出版し、西洋や日本の曲をもとに『国学唱歌集』（1905）を公刊していました。

1905年に科挙制度が廃止されたため、中国の若者たちは海外留学に立身出世の道を見出そうとしました。ちょうど日露戦争に勝った日本に多くの留学生がやってきて、李叔同もそのうちの一人でした。彼は音楽と美術を専攻しようとしていました。

結局、李叔同は1906年に東京美術学校に入学して油絵を専攻して、1911年春に卒業をしています。とはいえ、音楽への関心を持ち続けていたようです。1906年春に、独力で編集して東京で出版した『音楽小雑誌』は、近代中国では音楽についての初の定期刊行物となりました。

東京美術学校を卒業して帰国した李叔同は、教育者として音楽と美術を教え、中国の芸術教育における草分けの役割を果たしました。彼は1912年から17年夏まで、浙江兩級師範学校（浙江第一師範学校、現・杭州師範大学）で音楽と美術を担当し、そこで豊子愷や劉質平などの後進を育てました。《送別》は同師範学校在職中、1915年に作詞されたと言われます。

1918年、李叔同が教育界を去り、落髪して出家します。その後、豊子愷など彼の弟子たちは西洋美術や音楽の教育を続けることになります。そして、彼の作った唱歌も継承されていきます。《送別》など彼の作詞による十数曲は『中文名歌五十曲』（裘夢痕・豊子愷編、1927）に収録されました。

《送別》について

《送別》の歌詞は以下の通りです。

長亭外、古道辺、芳草碧連天。（長亭の外、古道の辺り、芳草 碧にして天に連なる）
晚風払柳笛声残、夕陽山外山。（晚風 柳を払いて 笛声残り、夕陽 山外の山）
天之涯、地之角、知交半零落。（天の涯、地の角、知交 半ば零落す）
一觴濁酒尽余歡、今宵別夢寒。（一觴の濁酒 余歡を尽くさん、今宵 別夢寒からむ）
長亭外、古道辺、芳草碧連天。
晚風払柳笛声残、夕陽山外山。

（『弘一大師全集』7巻、福建人民出版社、1991年、466頁）

「長亭」とは10里（約5キロ）ごとに置かれた古代の宿駅で、送別の場所です。夕風が柳の枝を揺らして、牧童の笛の音が聞えてきます。夕日は山の向こうに沈もうとしている中、送別の語らいが交わされています。こうして友人はみなそれぞれの道へと別れていき、寂しい限りです。せめても濁り酒を一杯飲みましょう。今夜はきっと寒々しい夢を見るでしょうから。歌詞は、このように友人との送別を歌うものです。

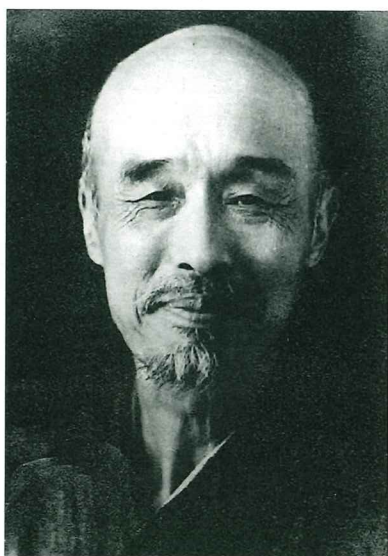
《送別》も寂しさを表わしますが、旅先で古里を思い出しては寂しさをかみしめる《旅愁》と少し違うように思います。《旅愁》のほうは原曲、《Dreaming of Home and Mother》とは、故郷を思い出すという点で共通しています。《送別》は中国文学のポピュラーなテーマで、たとえば王維の「君に勧む 更に尽くせ 一杯の酒、西のかた陽関を出づれば故人無からん」（「送元二使安西」）の名句は日本でもよく知られています。《送別》が歌い継がれたのは、メロディとリズムが新しいうえに、まさに古典的な詩情を湛えているからでしょう。

また、《送別》について、メロディは原曲《Dreaming of Home and Mother》とは一致しません。むしろ犬童球溪の編曲に一致し、球溪の編曲によりフレーズの末尾が明快な調子となったために、唄として好ましかったのだらうと音楽研究者の銭仁康は指摘しています。

国民的唱歌となった《送別》

民国期（1912～1949）によく歌われた《送別》は、人民共和国成立後も名作映画「早春二月」（1963）で挿入曲に使われましたが、その後文革中は封印され、改革開放後にリヴァイバルします。1983年の映画『北京の思い出』（原題「城南旧事」）で使われ、多くの人に強い印象を与えました。その後、卒業式などで歌われたり、さまざまな映画で用いられたりしました（2010年姜文監督の「譲子弾飛」、2017年馮小剛監督の「芳华」など）。2022年、北京冬季オリンピックの開会式で使用されたことは周知のとおりです。

《旅愁》のほか、球溪の《故郷の廃家》を下敷きに、李叔同は《憶兒時》（幼き頃の思い出）を制作しています。前世紀初頭のそうした音楽文化の軌跡を振り返ると、改めて日本と中国の近代の親近性と、交流の大切さに気付かされます。また、今後の新たな交流につながっていくことが期待されます。



出家後の李叔同



『音楽小雑誌』
(1906年正月3日序、京都大学図書館蔵)

送別

allegro

李叔同作歌



盡餘歡，今宵別夢寒。長亭外，古道邊，

芳草碧連天。晚風拂柳笛聲殘，

夕陽山外山。